

# 幼児の創作舞踊発表

## ——運動会と舞台発表の比較——

飯 田 正 江

### はじめに

平成元年新幼稚園教育要領で5領域のひとつとして「表現」が告示された。幼児の表現活動は、造形的表現、音楽的表現、身体的表現等があり、遊びや生活の場面で「表現」しながら毎日を過ごしているといえる。幼児の表現活動は、大人に比らべると言葉が未熟だったり、他の表現手段の獲得が不十分だったりするため、表情、身ぶり手ぶりから始まり、ごっこ遊び、舞踊等の身体的活動が活発で得意である。最も積極的な身体的表現とは自らの感情や思考を身体の運動で表現することで、それは自らが作り出す創作舞踊といえる。

邦正美は「芸術表現とは、舞踊の場合は舞台上での舞踊演技のことであるが、しかしそれは客席で観者がそれを観る行為があつてはじめて成立するものであり、表現はここにおいて完成するものである。」と述べている。いいかえれば、誰れかに観てもらって、舞踊表現は成り立ち、コミュニケーションを行うことにある。自らの内的な感情や思考を、身体の運動を通して表現し、それを観賞してもらって始めて舞踊表現が成り立つ。

幼児の場合も、本学紀要第9号「幼児の創作舞踊の実践—3才児の可能性—」で3才児の舞踊表現から充分伝わるものを感じることができた。幼児にとって、自分の創った舞踊を保母や友達、家の人達に観てもらい、共に感動できた時の喜びは大きく、そこから得るものも大きい。「表現」の最終目的は観てもらふことなのだから、その機会は、できるだけ与えたいと思うが、しかし現実には、舞踊は、劇遊びやオペレッタの中に少しとり入れられているにすぎない。幼児の舞踊は、表現のメディアである身体も小さく、運動能力もまだ未熟であるが、表現したい感動、訴えたいものはとても強い。紀要9、10、11号で述べた通り、その動きは表現豊かであるが、一連のフレーズとしてまとまっているもの、未熟なリズムパターンや、リズムパターンになっていないもの等、個人差は大きいが、作品のモチーフとなりうるものは沢山ある。幼児が表現した動きの中から、モチーフを選び、又は、フレーズを整え、良いモチーフを創れば、作品としてまとめることは容易である。

本学紀要第8号で「運動会における幼児の創作舞踊の意義」ですでに教育的価値は認めた通りである。

本年度、丸子町立幼稚園1園、保育園3園で4月から研究会を継続し、「運動会」と「おたのしみ会」に幼児の舞踊を発表した。この実践を通して、それぞれの発表の「場」の相違により、両者を比較し、互いに、より効果的な作品に構成する方法を考察するものである。

## 実践

場所 丸子町立わかさ幼稚園，長瀬保育園，南保育園，西内保育園

期間 1991年4月～11月

研究保育，研究会の回数 わかさ幼稚園 9回

長瀬保育園 3回

南保育園 5回

西内保育園 3回

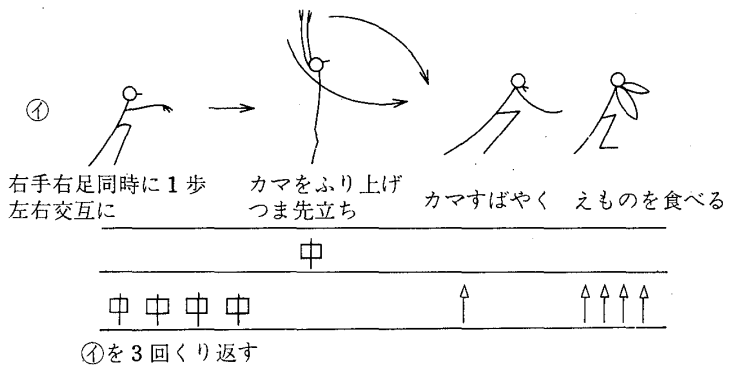
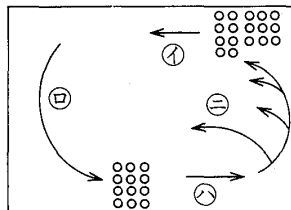
4園の保母有志による合同研究会 7回

上記の研究会を重ね，発表会の作品に仕上げたが，作品に至るまでの手順は，本学紀要第8号「運動会における幼児の創作舞踊（身体表現）の意義」に述べた通りである。

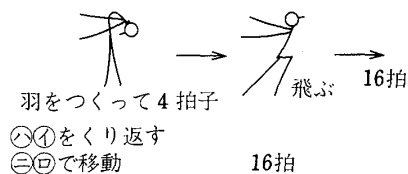
## I. 運動会

1. 「野原の友だち」 長瀬保育園 年長1組30人（男15人・女15人）  
 （8分10秒） 年中2組33人（男18人・女15人）  
 年少1組14人（男8人・女6人）

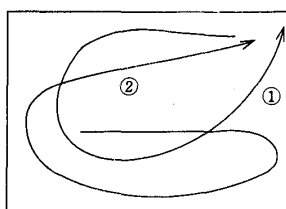
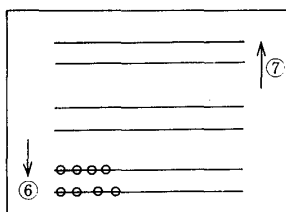
A カマキリ（年長）



⑥



A'



⑥ 2人で向い合い①の前半をやり 手をまわしけんか8拍

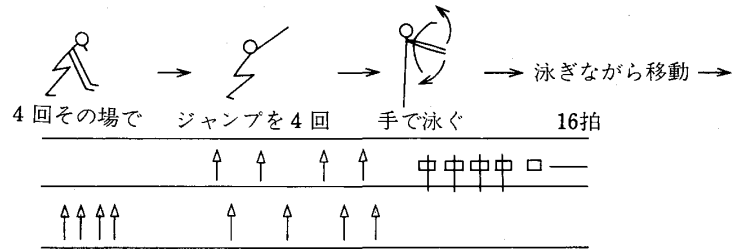
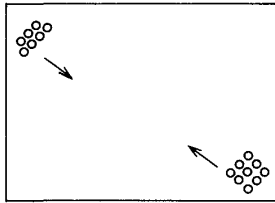
2人で ①にらみ合いながらまわる

⑥を反対へ押して行きくり返す

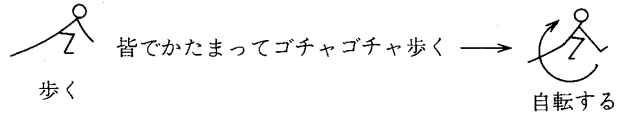
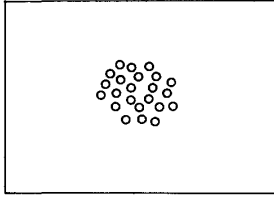
①全員が①で⑥の方向へ向う  
 " ①で⑦ "

①②で①②同時に飛びながら退場する、①が先に  
 入り②が続く

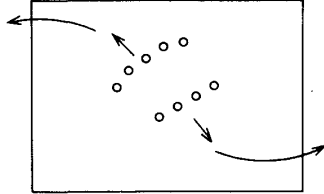
B カエル(年中)



⑪

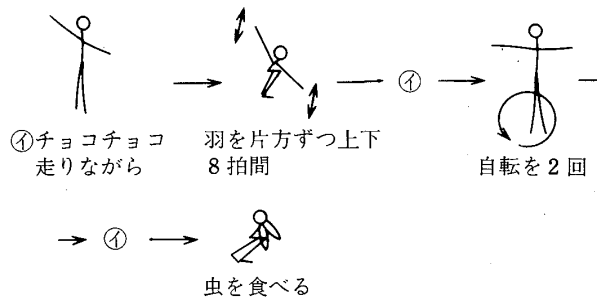
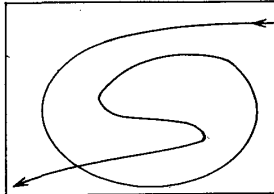


⑫



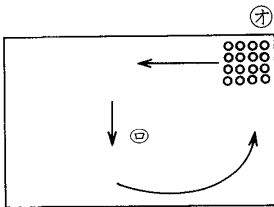
⑦を円の外側に向かってやりながら退場していく。

C トンボ (年少)



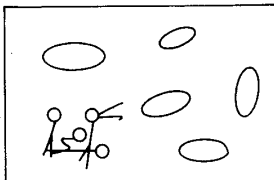
この運動を4回くりかえしながら保母の後ろを1列に続いていく

A'' カマキリ (年長)



①の運動でテンポを速くして入る。3回くり返し  
②の方向を全員向いてくり返す  
②の運動で自由に飛び移動

D



グループごとにかまきりをつくる

年長のカマキリは「怖い」表情をし、するどくカマを出し、それをふり上げ（つま先立ち）、えものをすばやく捕え食べる。そして飛ぶ。この一連の動きを皆がそろって重いリズムのある音にのると迫力十分である。次に年中がカエルで入ってくると、全体の印象が低くなり、カエルが沢山いる感じである。続いて年少のトンボが保母を先頭に一列に連なって入ってくると空間が広がり、トンボがスイスイと楽しく遊んでいるようである。

保母の感想

年少，トンボ

・動きが子供に無理がなくて良かった。始めは連なっているので波みたいだったが、だんだん音に合って、同時に運動に入れる様になった。作品の構成の中で、トンボが「ほっとする」役目だったと思う。3才児の存在観があった。

年中，カエル

・始めは喜こんでやっていたが、そのうち「疲れた、嫌だー」と言い出したが、音が入ったり、ビデオを撮ったりして興味をひきつけた。一生懸命やると疲れるようだ。カエルの集団がウジャウジャいる感じが良かった。カエルの動きと空間がうまく出ていた。音の出だしがむずかしかったが数えて出れる様になった。運動会当日はとても頑張って上手に出て感動した。

年長，カマキリ

・カマキリになりきって表現していた。年中からみるとすごく成長した。無理のない動きで構成ができた。題材が適切で、喜こんでやった。運動会が終了して1ヶ月以上経つが、今でも毎日やりたがる。音の出だしが解かる様になった。テンポが速くなる時の音のとり方が、半分の子供は出来るが半分はわからなかったの、シンバルの音を入れた。子供達のカマキリがとても表情があり迫力あり、感心し、感激した。

## 2. 「まつり」 わかくさ幼稚園

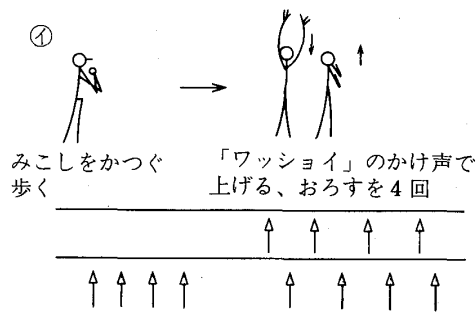
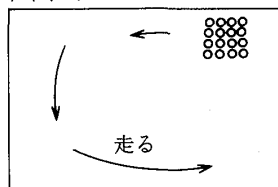
10分

年長1組 26人 (男13人・女13人)

年中1組 21人 (男8人・女13人)

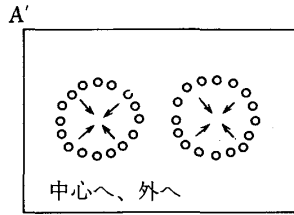
年少1組 14人 (男7人・女7人)

A 年中、年長合同



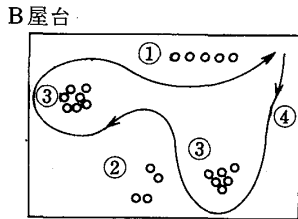
①を5回

②走って次の体形に移動 (みこしをかつぐ)



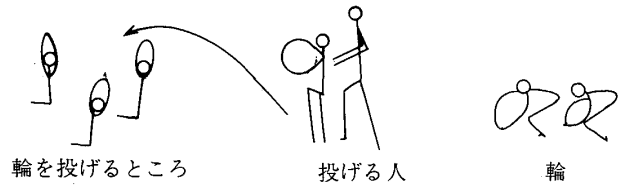
- ㊦  
④を中心へ。但しテンポが速くなる。2回  
中心に集まって低くなり立って「ワッショイ」のかけ声を4回  
外に向って同じことをくり返す

㊧自由におみこしをかつぎながら走って次の体形へ移動

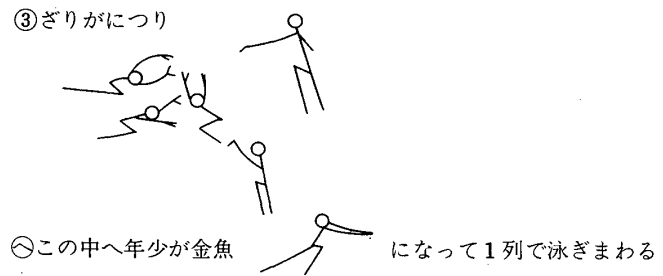


- ㊨ ①すいか割り
- 
- 順にすいかになり、割る人になる

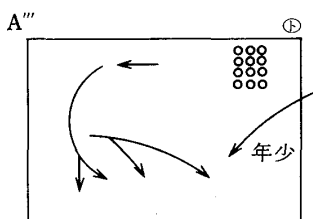
②輪投げ



③ざりがににつり

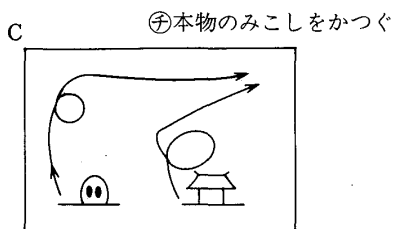


みこしをかついで走って次の体形へ移動



- ㊩  
みこしをかつぐ  
歩く  
「ワッショイ、ワッショイ」  
4回
- 

㊪を5回  
みこしをかついで本物のみこしまで移動、年少も入場して来る



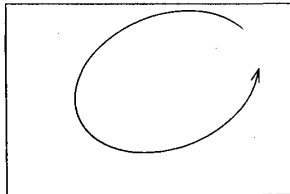
皆で作ったドラエモンみこしと神社のみこしを  
かつぐ。図の様に「ワッショイ、ワッショイ」と言いながら  
かつぎ退場

音は和太鼓と既成のテープで構成した。

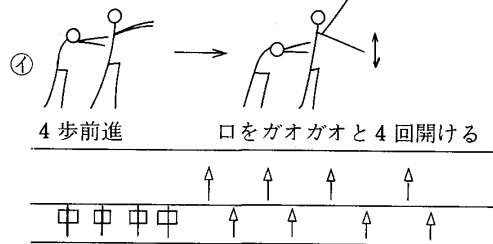
モチーフはみこしをかつぎ「ワッショイ、ワッショイ」と声を出し、天に向かって両手をつき上げ、威勢のいい「まつり」であった。

3. 「恐竜」 西内保育園 年長1組 16人（男11人・女5人）  
 年中1組 14人（男7人・女7人）  
 年中1組 15人（男7人・女8人）

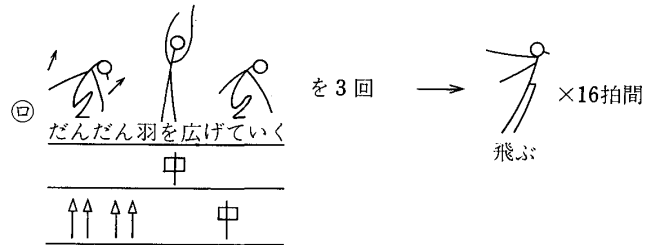
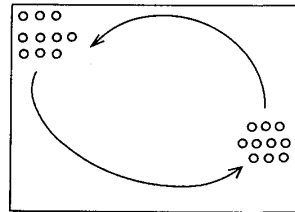
プロローグ（年少）



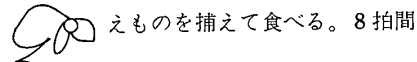
保母が先頭でその後を連なって



A 飛ぶ恐竜（年長、年少）

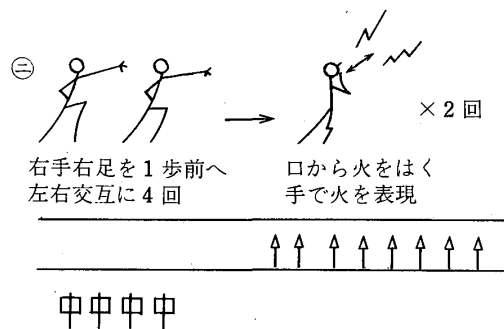
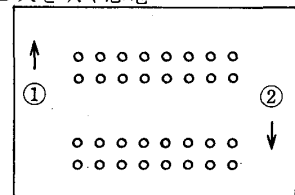


飛ぶ恐竜で、2群（年長・年中組ごとに）分かれ、向い合って羽を広げていく。そして移動し場所を入れ変える。その場についたら



① ②をもう一度くり返す。移動の時は次の体型へ並ぶ。

B 火を吹く恐竜

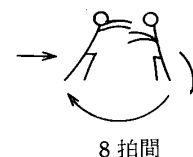


①②の方向に全員向って、続いて反対方向②へ向って  
 ③けんかの場面、体型③と同じ

③を向い合って押す、押れる2人の関係で行い、

向い合って戦いながら回る。

④を反対側に押し、もう一度くり返す。

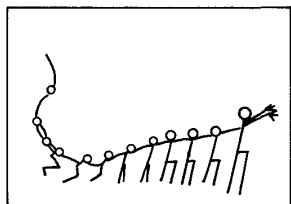


C 各自、自由に庭いっばいに飛び回る。

D



E



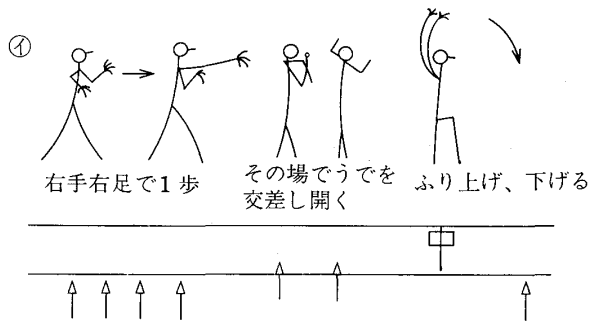
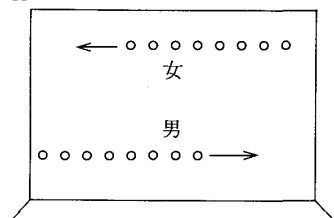
全員で大きな  
恐竜になる。

Aで恐竜の群が互いに向い合い、飛び、又くり返すところは迫力があつた。最後に全員で作った大きな恐竜がよかった。

## II. おたのしみ会

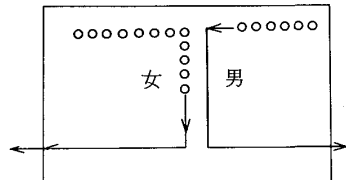
1. 「怪獣」 わかくさ幼稚園 年長1組 26日（男13人・女13人）  
5分

A



女と男が1列になり横向きで①をやりながら反対側に入る

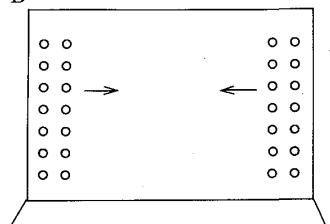
A



㊦

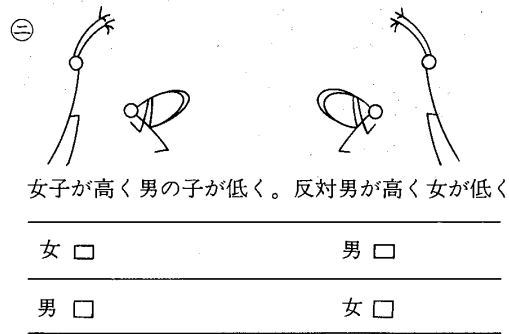
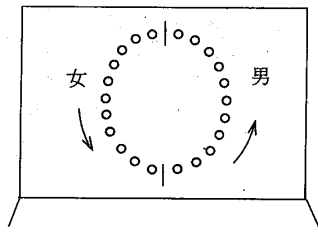
①で両側から入り、前へ向って進み左右に入る

B

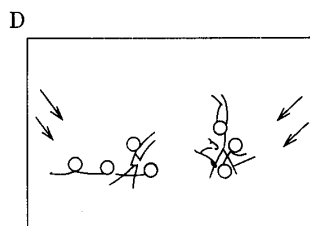
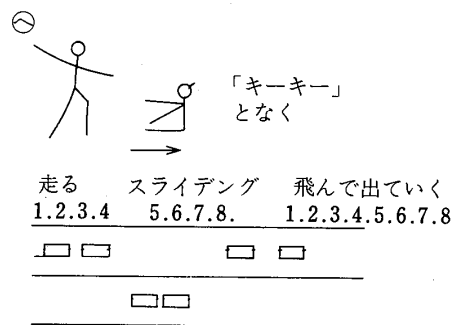
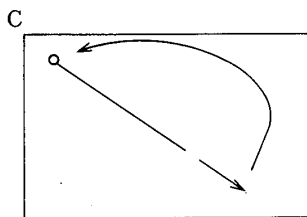


㊧

男と女と向い合って①で進む



男と女で分かれて、おそいかかる。小さくなるをくりかえす。  
④男女手を上げて中心を向き、全体でまわる



④をひとりずつ入ってやる 男

両側より羽のある怪獣で入りそれぞれグループで怪獣の形をつくり、その場で角やしっぽを動かす。2グループずつ2回、1グループ1回計5組が出る。

衣裳を男の子は緑、女の子は赤で紙を使って作った。それで対比がはっきりと戦っている感じがよく出たし、美しかった。

表情がとても良く出て、手の先まで怪獣になりきって表現していた。

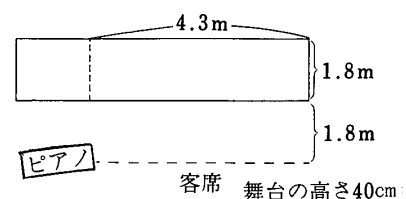
音は、既成のテープを何本か使い構成した。

保母の感想

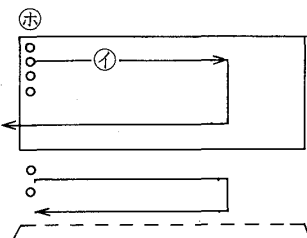
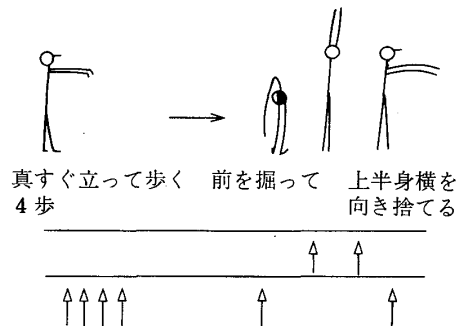
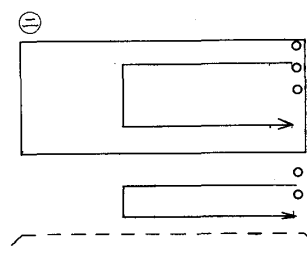
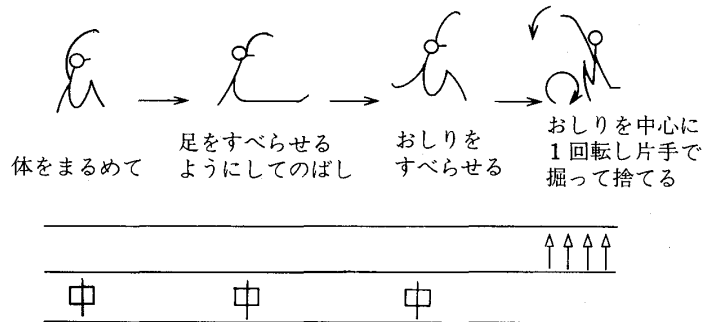
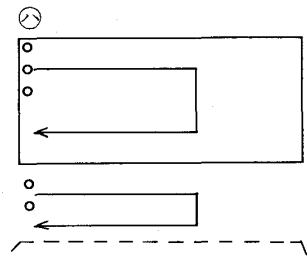
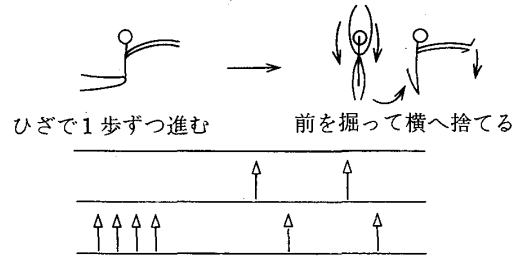
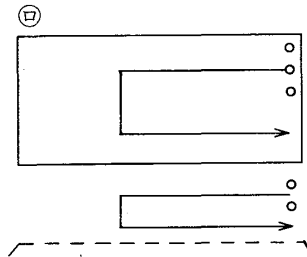
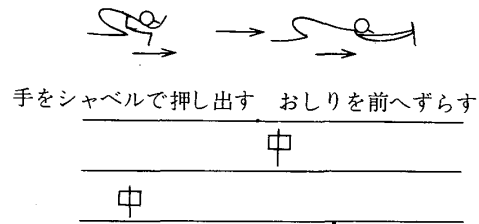
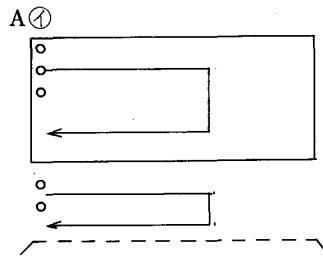
子供のイメージに合った題材で喜こんでやった。動きがむずかしくなく自然と表情まで、出せた。狭い場所であったが、迫力が出せた。親達が、子供の表現力に感心していた。

2. ショベルカー 丸子町立南保育園 年長2組 35人(男21人・女14人)(5分40秒)

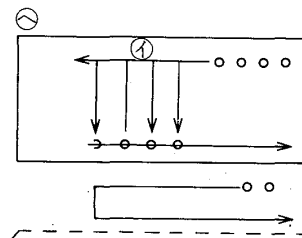
11月27日、身体表現を見て、たのしみ会で発表するため、右の図のような舞台で出来る様に構成をする。舞台が狭い事、舞台の下手に1ヶ所しか入退場口がない事、人数が多い事等を考慮し、構成をする。舞台が狭すぎるので舞台前1.8mも使用した。



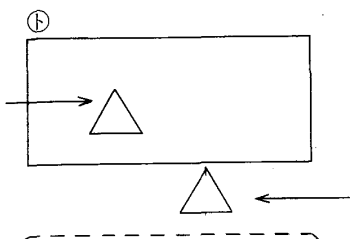




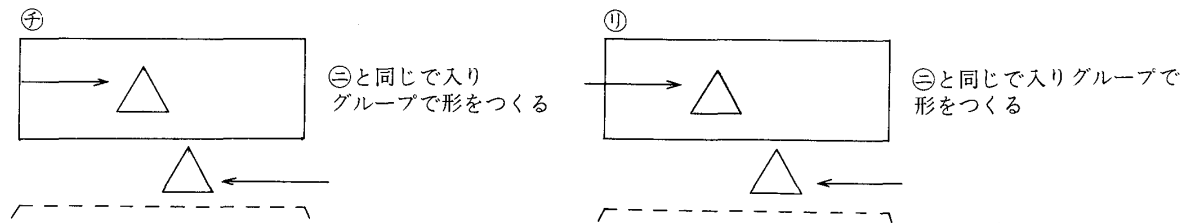
㊩で2回  
立って㊨の掘るを2回  
㊨の始めの動きで退場



㊩で1列になり2回  
そのまま前を向いて2回  
右手を向き㊩で退場



㊨の前半 で入り  
それぞれのグループの形をつくる



④～⑤はそれぞれのグループで行ない、幼児の出番は1度である。次のグループとの間が自然に繋がるように、低い姿勢の表現から順に高い姿勢の表現へと移行させるように工夫した。

⑥～⑩は④～⑤の各グループが出てきて、それぞれ皆で大きなショベルカーを創る。

舞台が、40cmの高さがあり、舞台上の3人と下の2人が良く見えた。

## 考察

運動会とたのしみ会（舞台）を比較すると次の図のようになる。

	運動会	舞 台
演技場所		
場所の条件	屋外（運動場） 演技空間が広い。天井がなく無限。 平面 幕がない。 包囲型空間、正面がない。	屋内（リズム室の舞台） 演技空間が狭い。天井がある。 高さがある。 幕がある。 対向型空間、正面がはっきりしている。
作品構成のポイント	運動が制限される。 人数が多い。 空間運動が主となる。 入退場の工夫が必要 1フレーズが長く、作品も長い。	運動の制限はない。 人数が少ない。 個運動が主となる。 幕があり必要ない。 1フレーズは短い。

運動会は、演技者を観客が包囲する形態で、これを包囲型空間という。又、たのしみ会の舞台の場合は、演技者と観客が向き合う形となり、これを対向型空間という。清水裕之は前者を「円環をつくるという行為は、集団のエネルギーを外に向けてではなく、この高められた内部へ向けて放つのである。そのような円環の内部で包囲されて行われる芸能は、個人を超えた巨大な力により根源的一者へと回帰させられることになる。包囲という芸能空間の形態が、観客に常に内省することを要求する芸能ではなく、むしろエクスタシーへと導くことを好む。」又、後者を「ふたりの人が対話しようとする」と自然と向き合うように、メッセージの伝達を意図するような芸能行為では、伝達する側の集団（演技者）と伝達される側の集団（観客）は互いに向い合う。」と述べている。

観客の視覚について考えると、運動会では、観客ひとりの視軸は方向性を持ち集中するが、それらが360°の方向から演技者に集まる。又、演技者の視軸も360°に発散する。観客の視覚には、その向こうに見える観客も見えることになる。

舞台では、観客の視覚は、客席のどこにいても、自分は客席の中央で観ている様に視軸を中心に描き観ている。又演技者の視軸もほぼ中心を持ち演技者と観客の視軸は等質といえる。従って、両者の演技空間の特性はかなり違うものであるといえる。

運動会と舞台の両者の演技空間の特性をふまえ、実践Ⅰ、Ⅱを考察し、作品の構成のポイントを明らかにする。

運動会では演技場所が屋外なので、「土の上で演技可能な運動」が条件となる。幼児は「這う」運動を好む傾向があり、今回も、「カマキリ、カエル、怪獣」等、這いながら表現していたが、それを自由に表現させた後、「今度は這わないで立ってやってみましょう。」と指導すると、すぐ工夫して立って表現をした。今回の発表の中で、グループで形を創る場合、ⅠのⅠのD、ⅠのⅢのD、E等の時は、下の子が腹ばいになっているが、その程度ならば可能であるが動きは制約される。

その点屋内で行われる場合は、ⅡのⅠのD、ⅡのⅡの作品全部が、這ったり、スライディングをしたり、膝やお尻をずらせながら進んだり等が可能で運動範囲が広い。

演技空間の広さにより、そこで踊れる人数が制約される。この場合の空間とは、演技ができる面積のことであるが、又、一方運動場はどこまでも広がる高い空の下で、舞台では天井があり、ここでは高さも作品の構成に大きな影響がある。私達は広い部屋にひとりでいると何か不安で落つかないが、狭い部屋だと安心感がある、それと同様に、小さな幼児にとって、運動場はかなり広い空間である。広い場所での演技は、空間に圧迫されて負けてしまう感じになり、迫力を出しづらいものである。そこでまず、人数をふやすことにより、量感を出せるので、今回、ⅠのⅡ、ⅠのⅢの様に年中、年長が合同で行った。紀要第8号で2例、又、Ⅰのわかき幼稚園では前年も合同で行った。年中、年長の表現は、紀要10・11号で同じ題材「ショベルカー」の実践を比較してみると、形態や基本的な運動（掘る、捨てる、進む。）という点では共通で、表現も似かよったものも多い。合同でやる場合は、「誰れでも出来る運動」が基本であるので、当然、年中が演技可能なフレーズを選択し、作品を構成することになる。

さて、人数をこうして多くしても、それでも、運動場は前述した空高く、広い空間であるので、この広さを感じさせないことが、最も重要なポイントとなる。

運動場は、演技者と観客との距離があり、個人の表現は良く見えない。表現の主体は、集団でかたまり量感を出せる群としての動きが中心となり、運動も空間運動が主となる。今回、ⅠのⅠのBでカエルが、㊶の様子に中央に集まり、ウジャウジャいる感じや、ⅠのⅢのAで恐竜が2群で向い合い飛ぶ表現は、群の効果が良く出ていた。又、ⅠのⅠの㊶、Ⅱの㊶㊷、Ⅲの㊶は次への体形へ移動するためのブリッジであるが、それも作品の内容を含みなが

ら全体の構成の中で、空間運動としてうまく生きている。

Iの2のAのまつりのモチーフが、両腕を思いきり空につき上げ「ワッショイ、ワッショイ」と大声を振り上げると、空の高い空間にも負けない力強さを感じた。

舞台での表現は、上記の場合と反対に、狭いので人数が多すぎるのが問題となった。年長だけ1組でも、運動をするには、とても狭い空間で、全員が同時には不可能なので人数を制限して出るということになる。IIの1のA'の怪獣では、男の子、女の子に分け、又、グループ毎、順に出場するようにした。南保育園の場合は図の様に舞台がさらに狭く3人が動くのがやっとであったため、舞台の前の観客と同平面も、舞台として使用した。又、入退場口が片方しかないため、同時に出入は不可能なため、①の運動は下手から出て下手に入り、観客の目をそちらにひきつけておき、その間に②は上手に入場し、用意をした。これを交互にくり返えしたが、入退場のために作品が途切れることもなく、スムーズにいった。

舞台では、演技者と観客の距離が近く、個人の表情や指先きまで良く見える。運動の中心は個人の運動でこれを個運動という。IIの①で怪獣になりきって、表情をこわばらせ、指先まで緊張させ表現しているので個人々々を良く見る事が出来た。

運動会では、前述した通り、360°から観られているが、実際には、作品を構成する場合4面として捉え、できるだけどの面も一度は正面となる様に構成する。但し、運動場が横巾があるので、横2面を正面と考え、Iの1のA、①②の場合の様に方向を変えて同じ運動を③④で行い。⑤でも方向を変えて2度くり返えし、⑥では押して行った方向が正面となり、それを180°後ろを向いてくり返えすと、反対側が正面となる。円は、どこでも正面でもあり正面でもないののでいつでも使用できる空間である。Iの1のD、Iの2のB、Iの3のD、Eは、グループごとそれぞれ4面から観て正面となるよう配置した。

舞台では正面が常にはっきりしているので、IのA'の②の様に客席に向って進んでいくと迫力を感じさせられる。この様に舞台は運動場と比較すると、正面から観ることのみを考えればいいのでその点は構成上、容易である。

舞台では舞台と客席の間に幕（緞帳）があり、はっきりと区切りがついている。幕が開けば始まるし、引かれれば終るので観客は、始まるとすぐ、幻想の世界へ入っていくことができる。演技者は、板つきで始める場合、幕が開けばすぐ演技が出来る。又、その幕を色々と工夫し、演出効果を上げることも可能である。

運動会では、一応入退場口があるが、作品が板つきで始まる場合や終了の場合は、入退場を演技と別に考えなくてはならないし、舞台と違ってそれも全部見えるので作品の雰囲気をつぶさない配慮も必要となる。今回Iの2とIの3は両者とも、演技しながら入場する様にした。終止は、Iの2のまつりは、そのまま退場していった。Iの1、Iの3は、グループで形を創り静止することで終止をはっきり感じた。退場は、別の曲で行った。

今回の様に年少、年中、年長が次々と演技する場合は、その入退場がうまくいくかで作品のイメージが変ってしまう。そこで、演技しながら動けるフリーズをそこに持ってくる。カマ

キリ、トンボ、恐竜は「飛ぶ」、カエルは「はねる、泳ぐ」等を表現しながら入退場をした。又、次の演技とのつなぎは、運動場のどこへ退場し、次がどこから入場し、演技を始めるかが問題となり、どちらかに観客の目をひきつけておくことである。

運動会は、広い空間を全体的に観るために観客は、椅子にかけるか、立って高い位置から観賞する。従って観客はいつでも全体が見えているということになる。ここでも空間的な広がりや移動が作品としての美しさや、おもしろさに繋がる。舞台では高さがあり、観客は舞台より下にすわるか、椅子にかけられるかであるので、舞台と同じ高さか、それより少し上から観るということになり、体形は観えない。しかしⅡの2のショベルカーは舞台が狭くやむを得ず舞台の下空間を使ったが、そのため、舞台上と下の両方を良く観ることができた。

運動会の「恐竜」と舞台の「怪獣」は、どちらも同じ題材で、ねらいも「怖さ」で、幼児の表現した運動も同質のものであったが、作品のモチーフのとり方が違った。運動会ではⅠの3のAの㊸「飛ぶ恐竜」とし、空間運動を可能としたのに対し、舞台では、Ⅱの1のAの㊸「歩く怪獣」で表情をこわばらせ、指を立て、ドシンドシと歩く怪獣とし個運動のはっきりしたものをとり上げた。そして、それぞれのサブモチーフとして、今の逆の表現をもってきて、作品を構成した。同じ題材でも、幼児が色々表現した中から、各々の場に適したモチーフを選択することで、どちらの発表の場でも可能にしたといえる。。

表現活動は、個人の表現を大切にするわけだが、今回の様に発表する場合は、多勢の人に観てもらうことが前程となり、そのために、作品を構成する上で、皆の動きの中から、動きを選択しなければならない。幼児の表現は、多様で個人個人皆違うし、次から次へと動きが発展し移り変っていく。その中で個人差の大きい幼児が全員で動けるフレーズを作り出すわけだから、誰れでも演技が可能でやりやすいものにしなければならない。しかも、「見栄えのする」ものが条件となる。1フレーズは強弱がはっきりし、リズムのつかみやすいものが良い。今回モチーフの右横に、リズム符を書き入れたが、それを見て解かる通り、単純なリズムであるが、強と弱を持っている。このモチーフを基本とし、それを発展させて作品を構成している。年令に応じて、簡単なモチーフを中心とし、そこにサブモチーフを2～3つけて作品を構成した。実践Ⅰの1、年長のカマキリは㊸㊸と㊸と㊸の3フレーズで構成し、年中のカエルは㊸の前半のはねると後半の泳ぐ、㊸の2フレーズで構成し、年少のトンボのフレーズの前半は全部同じで後半を3つ（止まる、自転する、食べる。）にした。幼児が表現するフレーズは、簡単で数を少なくし、しかも、作品を構成する時に、方向を変えたり、リズムを変化させることで変化をつけた。実践Ⅰの1のAとAは同じフレーズであるが、A'をテンポを速くし変化をつけ迫力を出した。この様に、ちょっとした工夫で、1フレーズを色々に変化させると、幼児にとっては簡単に演技ができ、観者にとっては、変化に富んだおもしろい作品となる。これは、運動会、舞台、両者に言える重要なポイントである。

紀要第8号で運動会の実践例を年令別に述べたが、今回の実践例は3例共、1作品を、年少、年中、年長の合同で行っている。前回に比較すると、幼児にとって無理のない構成ができた。前述の長瀬保育園の保母さん達の感想の通り、年少はかわいらしいトンボ、年中は、運動能力も向上し、はねるカエル、年長は表情豊かに怖いカマキリと各々の特徴を出し、作品が構成できた。幼児は自分達の動きの他に、他の年令の動きを覚え、運動会の頃は、すっかり上手に踊れるようになった。西内保育園では、年少はプロローグという形で参加した。わかき幼稚園では、年少は金魚になって泳ぎ回ったり、最後は年中、年長といっしょにおみこしをかついだが、この様に簡単な構成で参加させると、園全体の作品として運動会を盛り上げることができた。広い空間を感じさせないためにも、この様な構成も1案であると考えられる。

### おわりに

実践を通し、運動会、おたのしみ会で幼児の表現を保母が構成し、作品として発表することが出来た。その作品は、表現内容が充分観客に伝わり、感動させるだけのりっぱな芸術作品であった。幼児は自分の創った表現を、自分の大好きな保母、家の人、友達等に観てもらって、共に共感することが出来、表現する喜びをさらに大きくした。そして、次への表現に積極的にチャレンジしていくのである。

運動会とおたのしみ会の両者を実践したわかき幼稚園の保母は、「舞台は初めてだったが、正面がはっきりしていてやりやすかった。」と述べている。

今回、両者を比較したことで、各々発表の場の特性がはっきりとつかめた。今後はこれを積極的に利用して、幼児の表現をもっと生かせる作品の構成をし、発表を実践したい。

今回はたのしみ会の発表は、年長だけであったが、紀要9、10で述べた3才児、4才児の表現や、幼児の好きなポーズ遊びや、即興をとり入れた作品が可能ではないかと考える。それらを実践することも今後の課題である。

#### 注

- ①下手 観客から見て舞台左側
- ②上手 観客から見て舞台右側
- ③板つき 開幕の時、演技者が舞台に出ていること。
- ④リズム符 舞踊のリズム符は、上段を強下段を弱とする。

音符は△＝♪ ♯＝♪ 中＝♪ □＝○ に相当するが、長さは、その中の相関関係でなり立つ。

#### 参考文献

- 舞踊の美学 邦正美 富山房 1973年
- 舞踊創作と舞踊演出 邦正美 論創社 1986年
- 動きのリズム 邦正美 万有社 1957年
- 劇場の構図 清水裕之 鹿島出版 昭和60年
- 上田女子短期大学紀要 8, 9, 10, 11, 12, 14号 飯田正江